「私の身体が、あなたの匂いと……
昨日いっぱい可愛がってもらったおチンポへの期待で……
興奮してしまってるの……」
「こんなにピンクに充血して、濡れて光ってる……」
「ここは、あなたのための器官よ。
あなたを包み込んで、気持ちよくするための
あな。……♪」
あな、と言いながら
亜美は膣口を押し広げた。
小さくて暗い穴が、
柔肉の奥に
ぽっかりと
口を空けている。
「奥まで見て。この内側にある粘膜も、
ネバネバした汁も、さらに奥の、
子宮へと繋がる小さなミゾも、すべて……」
「あなたのおチンポに擦られて、
突かれて、熱いザーメンを
ぶっかけられるためにあるの」
小さく深い穴の内側で、
ピンクの粘膜がフルフルと揺れた。

「またいきなり、そんな深く……あああああッ！！」
男「すっごく熱くて気持ちいいよ！亜美ちゃんはどう？どうなの？」
「はい、私も……私もやっぱり、こうやっておチンポでおマンコを突いてもらうのがイイです！」
「イイのっ！　ああっ……すごくイイッ！この体勢だと、さっきまでと違うトコロに当たって……イイのぉッ……♪」
「イクイクッ！すぐイっちゃう……イっちゃう！あ、あ、あ……あはぁぁぁぁっっっ！！！」
「あヒィッ！気持ちイイッ♪気持ちイイのッ♪おチンポがグイグイ突いてきて、気持ちイイのぉぉッ！！」

「あンッ♪
押し込むだけだったら、
こんなにピストン運動
しなくていいでしょ♪」
「ああンッ♪ 奥に届くぅ♪
太くて長いおチンポが、
またおマンコの奥の
コリコリしたところ、
ノックしてまぁす♪」
「やだもう、
サービスじゃなくて、
最初からそれが目的ですよね？」
「アヒッ♪
おマンコっ♪
おマンコに種付けっ♪
強制的に種付けされちゃうぅぅ……♪」
男「いやいや、
マンコの奥まで押し込むには、
こうやって
チンポを使うのが一番いいんだよ。
ホラ、奥に届いてるでしょ」
男「押し込むだけじゃ
ナンだからさ、
さらに新鮮なザーメンも
オマケしとくね。
こうやってれば
すぐに射精るからね」
男「あ、バレちゃった？
でももう受け取り拒否は
できないからね。
いま、亜美ちゃんのおマンコの奥に、
強制的に種付けザーメンお届けするよ」

「あなたの精子に征服された
亜美のおマンコ、見てぇ……」
「おマンコの内側……膣粘膜に、
あなたの濃厚なザーメンが
ベッタリ粘着してる……」
「まるで生クリームを
盛り付けたみたいに、
こんもり、コッテリと
白濁液が貼りついてるわ……」
「これ、全部精子なのよ。
あなたの数億匹の分身が、
亜美の膣内に植えつけられて、
住み着いちゃってるの……♪」
「私の生殖器の細胞全体が、
あなたの精子に侵入されて、
犯されてる……♪
細胞レベルでマンコの全部を
あなたのものにされちゃった……♪」
「セーラー戦士の優秀で健康な免疫系でも、
精子の侵食には抵抗できない……
だって、あなたはオスで、私はメスなんだもん……♪
メスは、オスには絶対に敵わないんだもん……♪」

「はむっ……」
「じゅるっ……むぐっ……ちゅるるっ……はむう……っ」
（これが新鮮なザーメンの味……！）
（青臭くて、苦くて、キツい味だわ……。
それに、あきらかに種類の違う匂いも……
あ、コレ、私のおマンコの味なのかしら……）
（でも、好きな味……
いやらしい味だわ……♪
それに太くて、口の中がいっぱいになっちゃう……）
「男らしくて、素敵なおチンポ……♪」

「ああっ、チンポォ！
チンポでズコズコされるのがこんなにイイなんて知らなかったわ！
もっとして！　もっと亜美マンコをズンズン、ずぽずぽしてぇ！」
「チンポぉ！　チンポぉぉ！　もっとチンポぉぉぉ！！」
「女の子にこの穴を授けてくれたことを、神様に感謝したい……
気持ちいい……気持ちいいの……！」
「突き刺さっちゃう！
私の一番気持ちいいところにチンポ突き刺さっちゃう！
こんなの知らない！　こんなに気持ちいいの初めて！」
「私って穴なんだわ。
こんな簡単なことに今まで気が付かなかったなんて。
セーラーマーキュリーはチンポ専用のシゴキ穴なのよ。
その証拠に、チンポに挿されているだけで、
こんなに気持ちいいんですもの」

「ああん……おチンポって、美味しい♪　舐めさせて……もっと……」
「お口に太いの咥えたいの……♪
亜美のお口にも、おマンコみたいにハメハメしてぇ……♪」
「おマンコで楽しむみたいに、
セーラーマーキュリーのお口の締め付けとか
吸い付く気持ちよさ、味わって……♪
私のお口の中でおチンポじゅぽじゅぽ遊びしてぇ♪」
（このまま、もっと深く……
喉の奥の、もっと深いところまで
おチンポ咥え込みたい……♪）
（硬くエラの張りだしたこの亀頭を、
食道深くまで突っ込まれて、
喉粘膜をゴリゴリ擦られたいわ……♪）

「生チンポを亜美の
無防備マンコにハメて、
好きなだけ子作りファックして♪」
「セーラーまんこに
無責任中出しキめて♪
ザーメンどぴゅどぴゅ発射して、
セーラーマーキュリーの
いやらしマンコを征服してぇ♪」
「無責任な種付け射精を
イヤというほど繰り返して、
亜美にあなたのおちんぽの凄さを
教え込んで！
亜美はIQ300の天才少女だから、
おちんぽの素晴らしさを
どんどん憶えちゃう！」
「あなたが教えてくれるエロいこと、
もっと知りたいの！
あなたのおちんぽに世界一詳しい、
エロ天才少女になりたいのぉ♪」

（おチンポがびくんって動くたびに、
おマンコの奥で熱いものが広がる……
精液が、注ぎ込まれてる……。）
（この人は、私の身体にオスとして興奮して、
こんなにたくさんの精液を出してくれてる……。）
（この嬉しさはなんなの……？
ただ気持ちいいだけじゃない、
私も興奮して、
すごくエッチな気持ちになってる……。）
（反応しているのは、私の中の、
理性ではどうにもならない部分……。
頭じゃなくて、身体のもっと深い部分から、
この気持ちが湧き上がってる……。）
（こんなに太くて立派なおチンポに、
獲物として認められて、
大量のザーメンを与えてもらえた、
メスのおマンコの純粋な悦び……♪）
（ああ、おチンポ。
おチンポ、おチンポ。
このたくましいおチンポに、
私、メスとして認められてる……♪）
（私、受け入れるわ……この幸福を……。）

「やだもう……顔中、ザーメンだらけ……
セーラースーツにもかかっちゃって……」
男「罰だから、そのまま行くんだぞ」
立ち去る理由を告げていないのに、
男にはこれから亜美が何処へ行くのかわかっているようだった。
（やれやれ……。でも、しょうがないか。）
（私、この人にはもう絶対服従って、
子宮と心で決めたんだし。）
「はぁい……水野亜美はこれから、
あなたのザーメンが
こってり乗ったビッチ顔で、
仲間たちのところへ行きまぁす……♪」
「ティッシュになった
セーラーマーキュリーの顔、
みんなに晒してくるわね……♪」